

神様は万物を新しくされる

ヨハネ黙示録21章5～8節

2022年12月04日

松田 基子 師

聖書は永い人類の歴史の中で、神様の呼びかけに応答した人々が、神様からの啓示を受けて、神様の御心を示した書物です。それは世界の創造から始まって、その終結までが記されています。その中心内容は、創造主なる神様と、その神様が、愛の対象として創造された人間との関係に終始しています。聖書は私達人間に、自分が如何なる存在なのか、どう生きなければならないのか、自分の存在は、死を超えてどうなるのかを、明確に教えている命の書物です。

創世記で始まった聖書は、ヨハネの黙示録で完結しています。そこを貫く大切なテーマは、

『創造主なる神様の人間に対する愛です。』さて、創世記の1章には、神様による天地創造が記され、全てを整えられたその最後に、人間が創造されるのですが、1章26節に、

「神は言われた。

『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。』

神は御自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。男と女に創造された」

とあり、2章7節では、

「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」

とあります。

神様は御自身が創造された世界を、更に麗しく成長させるために、御自身の意志を世界に実現していく存在として人間を創造されました。

人間に愛と期待を込めて、御自身の性質に似た者、御自身に応答できる者として、神様の命の息が吹き込まれ、人間を特別な存在、神様の似

像を持つ者として創造し世界に送り出されました。

世界は神様のご意志に従う時にのみ、愛に根差した豊かな成長が与えられました。神様は人間を愛し、人間が御自身に応答し、従う事を求められました。従うと言う事は、

『自分の全存在を委ねる主人を持つ』

と言う事です。神様は創造主であり、人間は被造物です。人間は神様を主とし、全信賴して従うところに、人間の幸せがありました。神様は人間が、神に造られた被造物である事の分を超えることがない様に、人類を代表するアダムに、一つの命令をお与えになりました。それは創世記2章15節に記されています。

「主なる神は人を連れてきて、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。主なる神は人に命じて言われた。

『園のすべての木から取って食べなさい。

ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう』

と命じられました。」

ところが、創世記3章を見ますと、誘惑者が現れ、アダムの妻エバに、神様の言葉を疑わせました。エバは神様の言葉より、誘惑者の言葉信じて神様の禁止命令を破りました。

創世記3章6節には、

「女は実をとって食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた」

とあります。神様は13節に、

「何ということをしたのか」

と嘆いておられます。

17節で、神様はアダムに対して、

「おまえは女の声に従い、取って食べるなど命じておいた木から食べた。お前のゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。お前に対して土は茨とあざみを生えいさせ。野の草を食べようとするお前に。お前は顔に汗を流してパンを得る土に返るときまで。お前がそ

こから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る」と言われました。

ここには神様に背いた人間は、生きる苦しみと、嘆き、死を負わなければ成らない事が言い渡されています。パウロはローマの信徒への手紙5章12節に、

「一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです」

と言っています。ところが神様は人間の祖以来、神様に聴き従わず、罪を犯し続けて、滅び行く人間を御見捨てになることが出来ないで、時間の中に置かれた世界を、人類を救済するための歴史に導かれました。その方法は、人間の側には罪を解決する力が全くないために、神様御自身の方から助けの手を伸べて下さいました。神様の人間を愛する愛ゆえの決断でした。

神様は人類の救いのために、全人類の価値に勝る神の御子を人類の罪を贖わせるために、この世に人の子として誕生させられました。それがイエス・キリストです。イエス様はその身に全人類の罪を引き受け、身代わりの十字架に架かり、全人類の罪を贖われました。神様はイエス様の十字架の贖いを受け入れて、人類の罪の赦しの証明に、イエス様を十字架の死から三日目に復活させられました。

パウロはローマの信徒への手紙3章23節で、「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされる(神様に良しと受け入れられる)のです」と言っています。神様からの一方的な驚くべき恵みです。イエス・キリストによって救いの道が開かれたことによって、神様による歴史の時計は世界の終結に向かいました。しかし、それは、直ぐに行われるのではなくて、神様はイエス・キリストの福音が宣べ伝えられる時間をお与えにな

りました。

『一人でも多くの人が救われる』ためでした。

しかし、神様に敵対する悪の勢力は、人間を愈々悪に誘惑し、イエス・キリストによる救いを妨害しました。歴史の中でキリスト教徒は、誠実で、真実に生きて、ただ、イエス・キリストを神とし、主とする事に於いては、一步も譲らず貫き通したために、この世の自分を神とする権力者たちから、迫害を受けました。誠実に、真実に生きて、最も信頼されるべき存在なのに、この世は何故キリスト者をそれ程までに迫害したのでしょうか。

パウロはエフェソ信徒への手紙6章12節で「わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです」

と言っています。キリスト教の歴史が、迫害に曝されたのは、神様に敵対する勢力の働きであり、神様への抵抗であるために、それは激しく、過酷なものであったのです。神様は一人でも多くの人がイエス・キリストの御救いを信じて救われることを待っておられますが、その為にいつまでもキリスト者を迫害の中に置かれるのではありません。イエス・キリストによって、世界を終結させることは、神様の御計画でしたし、イエス・キリストは復活して、天に帰られる時、キリスト者を救い、世を裁くために再臨されることを約束して下さいました。

ヨハネの黙示録は、神様による時間によって始まった世界が、神様によって、時間が閉じられる時の事が記されています。神様に敵対する勢力のことを、聖書はサタンと呼んでいます。黙示録20章7節から、

「この千年が終わると、サタンはその牢から解放され、地上の四方にいる諸国の民、ゴグとマゴグを惑わそうとして出て行き、彼らを集めて戦わせようとする。」

(エゼキエル書の38～39章に登場するマゴグ地方のゴグは大軍を率いて、イスラエルを責めますが、エゼキエルは、彼らは主なる神によって滅ぼされると預言しました。そこからゴグとマゴグとは聖なる民を攻めようとする指導者と人々を意味します。サタンは彼らを惑わし、詳訳聖書では、唆して、彼らを集めて戦わせようとするのです。)

「その数は海の砂のように多い。彼らは地上の広い場所に攻め上って行って、聖なる者たちの陣営と、愛された都とを囲んだ。すると、天から火が下って来て、彼らを焼き尽くした。そして彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄の池に投げ込まれた。そこにはあの獣と偽預言者がいる。そして、この者どもは、昼も夜も世々限りなく責めさいなまれる」

とあって、遂に神様に敵対する勢力は全て滅ぼされることが預言されています。

その後、著者ヨハネは幻の中に、21章1節で、「わたしはまた、新たな天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった」

とあります。創造主である神様は創り替えることがお出来になるお方です。神様が御覧になって、悪しきものは取り去られます。古代人にとって

『海は、神様と人間に敵対する勢力が住む恐ろしい所だ』

と考えられていました。それが無くなることは、敵対する存在が滅ぼされた事を意味します。悪しきものが滅ぼされた後、2節には、

「更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下ってくるのを見た」

とあります。エルサレム、それは神様の名が置かれ、その臨在を表す神殿が建てられ、神様への祈りと、祭儀が行われた聖なる都です。

パウロはガラテヤの信徒への手紙4章26節で、「天のエルサレムは、いわば自由な身の女であって、これはわたしたちの母です」

と言っています。エルサレムそれは、神の民の住むべき所です。神様はこの世の惑わし、迫害を耐え抜いたキリスト者の群れ、教会の住むべき所として、新しいエルサレム、それも夫の為に着飾った花嫁のように、驚くばかりの美しさと、完璧さで整えて天からお与えになり、下って来る様にされるのです。そこに天使の声が響きます。3節に、

「そのとき、わたしは玉座から語りかける、大きな声を聞いた。

『見よ、神の幕屋は人の間にあつて、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもは過ぎ去ったからである』

とあり、全く新しい世界がもたらされるのです。

神様が人間を創造された時、人間は神様の似像に創られ、エデンの園に置かれ、神様との交わりが与えられ、神様の足音が聞こえる近さに置かれました。それなのに神様に背いたために関係は断絶し、楽園から追放されてしまいました。しかし、神様の方から呼び掛けて下さり、神の民に選ばれた、出エジプトのイスラエルに、幕屋を立てる様に命じられました。神様は幕屋に於いて御心を示されました。幕屋は神様の臨在を表しています。

「幕屋が人の間にある」

とは、神様との交わりが回復した事です。今や人間の罪がイエス・キリストによって解決し、遂に神の国が来る時、新しいエルサレムにおいては、あのエデンの園の様に、神様は人と共に住み、交わりを持って下さるのです。それまでの、アダムに始まった人類の歴史は、人間の罪のために、人生は労苦に満ち、悲しみと嘆きに包まれ、死に呑み込まれていましたが、新しいエルサレムには死に打ち勝って復活されたキリストが共に居られるのです。もはや死も無く、悲しみも、嘆きも、労苦もなくなるのです。天使は、

「最初のもは過ぎ去った」

と言っています。すると5節で、

「玉座に座っておられる方(神様)が、
『見よ、わたしは万物を新しくする』
と言ひ、また、
『書き記せ。これらの言葉は
信頼でき、また真実である』」

と神様御自身が言っておられます。世界を創造されたのは神様であり、それを終結出来るのも、神様であり、万物を新しく出来るのは、神様以外に居られません。

6節に、神様は宣言しておられます。

「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。」

アルファはギリシャ語アルファベットの最初の文字で、オメガが最後です。新約聖書はギリシャ語で書かれました。アルファでありオメガであるとの意味は、

「初めであり、終わりである」

と言う事です。世界の創造を始められたのは、神様御自身であり、その終わりを決められるのも、執行されるのも神様です。全ては神様御自身の御手に掛かっています。そのお方が救いを求める者に言っておられます。

「渴いている者には、命の水の
泉から価なしに飲ませよう。」

水は命の象徴です。神様はイエス・キリストによって、罪の贖いが成就したことにより、御子の救いに、心から縋る者に、永遠の命を何の条件も付けず、無代価でお与え下さると約束して下さっています。

7節には、

「勝利を得る者は、これらのものを
受け継ぐ。わたしはその者の神に
なり、その者はわたしの子となる」

と言って下さっています。勝利を得ると聞きますと、積極的で、勇ましい信仰者でなければ、
『新しい神の国には、入れないのではない
か』

との不安が出て来るのではないのでしょうか。

イエス様は、ヨハネ福音書16章33節で、

「あなたがたには世で苦難がある。

しかし、勇気を出しなさい。わたしは
既に世に勝っている」

と言われました。私達自身はなお、罪深く自分の信仰で、神様に従い続ける事は出来ない者です。だからと言っていい加減で良いと言っているわけではありません。ただ、イエス・キリストの十字架の贖いを信じ、イエス様に縋り、

『神様は必ず万物を新しくなさる。神様はイエス様の人類への愛に答えて必ずイエス・キリストを地上に再臨させ、初めに創造された世界、罪に汚された世界を裁いて終結させ、イエス・キリストに信頼し、待ち望んだ者のために、新しい天と地、新しいエルサレム、つまり神の国をお与えになり、イエス・キリストの贖いの故に神の子の身分を与えて、神様と共にある生活をお与えになる。』

この約束を信じ、人生の目標をそこに置いて、誠実に真実に生きる、それが私達にも出来る事ではないでしょうか。この信仰と人生観に立って、与えられた道を、誠実に真実に歩んで参りましょう。

お祈りをいたします。

愛と憐れみに富みたもう天の父なる神様。

罪深い私達を憐れみ、御子イエス・キリストの御救いをお与え下さったにも拘わらず、生ぬるい信仰生活を送っていることをお許し下さい。

神様はやがての日、この罪の世界を終結させ、万物を新しくしてくださいます。

その日に向かって直すらイエス・キリストを信じ、従っていく者とならせてください。

イエス・キリストの平安をお与え下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。